

## ヤンゴン素描 13

### ゴルフ場駅発、再生魔法瓶

山形洋一

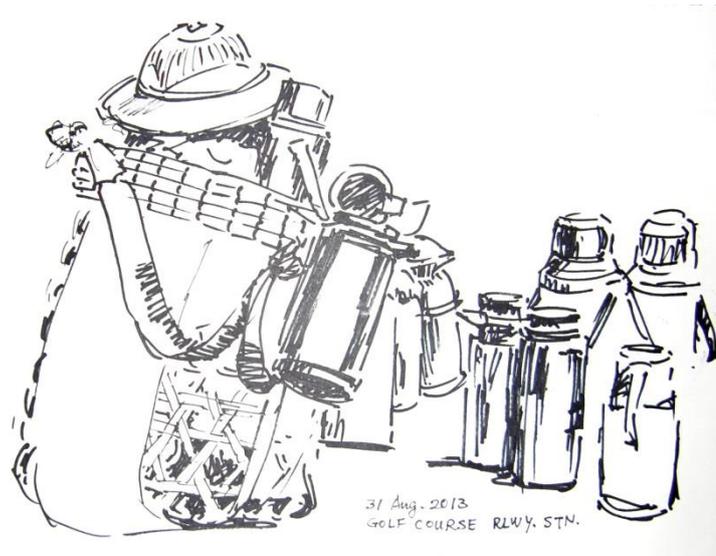


図 1 竹かごに詰め込まれた再生魔法瓶。かごの上の探検型ヘルメットも竹製だ。

ヤンゴンの環状線が開通したのはそう古いことではない。長いあいだシュエダゴンに置かれていた兵営（カントンメント）が町の北東のミンガラードンに移ったのを機に北部路線がつながったのは 1932 年以降のことらしい。インセイン発ヤンゴン経由ミンガラードン終着という U 字形運行をする列車は今でも残っている。

ただし正確には、U 字の左上にあたるダニンゴーン駅から東へ 1.2 キロメートルの「ゴルフ場」駅までは 1909 年に開業しており、全線開通の前にとりあえずつないだ直線を含めた G 字形運行で、ヤンゴンやインセインに住むゴルフ好きの英国軍人たちを運んでいたようだ。

100 年前とちがっていまどきゴルフ場に汽車で通う人がいるわけもなく、駅は閑散としている。住宅地としても開発途上で、人口は少ない。周囲はレンガ工場か、その跡にできた窪地に水を張った空心菜の水田や養魚場、さらにその上に建てた養鶏場などが目立つ。

駅の西には国道4号線が南北に走り、また鉄道と並行して東西にはカイエーピン通りが走り、どちらも交通がはげしい。1日に10本程度の列車など当てにせず、早くて本数の多いバス便を利用するのが人情というものだ。

何の取り得もないこの田舎駅のプラットフォームに、長塚節の小説『土』に出てくる「草刈り籠」によく似た目の粗い竹かごが10個ばかり並んでいるのを見たことがある。中に詰められているのは魔法瓶だった。「魔法瓶」はとうに死語だろうが、ゴルフ場駅に並んでいるのはコードがなく「電気ポット」とは呼べない。銀を塗ったガラスの真空ビンをアルミやプラスチックの外枠で保護し、コルク栓をつけただけのものだから、「魔法瓶」の名がしっくりくる。

よく見るといずれもだいぶ使い古されていて、キズやへこみが目立つ。外見など気にせず、真空ガラス瓶を取り換えて再生したもののようなのだ。それをかつぐ行商人のほとんどがインド系の顔立ちなので、おそらく駅近くにインド系の魔法瓶再生工場があるのだろう。

再生魔法瓶行商の一団と同じ列車に乗り合わせたので、彼らがどの駅で降りるかを観察してみた。東に進んだ列車がやがて南に折れても、人口希薄な軍用地の駅（ミンガラドン・ゼイからウェイバーギーまで）ではだれも降りず、北オカラパのニュータウンにさしかかってから駅ごとに一人二人と降り始めた。

チャウ・イエドウィン駅で4人降りるのを見て、跡をつけることにした。彼等は駅から東へ畑中の道を行くと、トゥダンマー通りのバス停で北に向かう乗り合い小型トラックに乗り込んだ。トラックの最後尾に立ち、背負い紐をたすきがけにしてかごを客室の外に出している。こうすれば荷物料金を払わずにすむからだろう。一人当たり50チャットの運賃ではあまり遠くまで行けるとは思えない。北オカラパの公設市場あたりで売るか、それとも橋を渡ってニューダゴン方面まで足を延ばすのか。言葉ができないので残念ながら小型トラックはそこで見送ることにした。

たとえ修繕したにしてもこんなみすぼらしい魔法瓶をいっただれが買うのか不思議だが、町の角々にある茶店なら需要があるだろう。幼稚園で使うような低いテーブルには、アルミの外枠がへこみプラスチックの一部が欠けた茶渋まみれの魔法瓶をよく見かける。ヤンゴンの町には少なく見積もっても1万軒ほどの茶店があるだろう。茶店ごとに最低5個のテーブルがあるとして、魔法瓶の数は最低5万。じっさいは十万個を下る

まい。そのうち何百個が毎日割れているとすれば、魔法瓶再生商売も立派になりつつわけだ。

バスに押され気味の列車には、かさばる荷物を安く輸送できるという利点がある。ダニゴンゴンの野菜市場から積み込まれる空芯菜や、ゴルフ場から積まれる魔法瓶など、ま

さにその典型だ。植木の苗、スポンジの枕、竹で編んだ帽子、プラットフォームで組み立てられた中国製の食器棚など、いずれも空気が主体の荷物だ。カマーユッ駅から乗り込むドリアンは刺と匂いで乗客を遠ざけるので、これも見えない空気を運んでいることになろう。

ヤンゴン環状線では最近エアコン車や特等車が走るようになり、外国人観光客に人気があるようだが、もっぱら「空気」をはこぶ行商人の姿や、車内の食べ物売りの活気を見て楽しむには、やはり一般車両で旅するのが本道というものだろう。

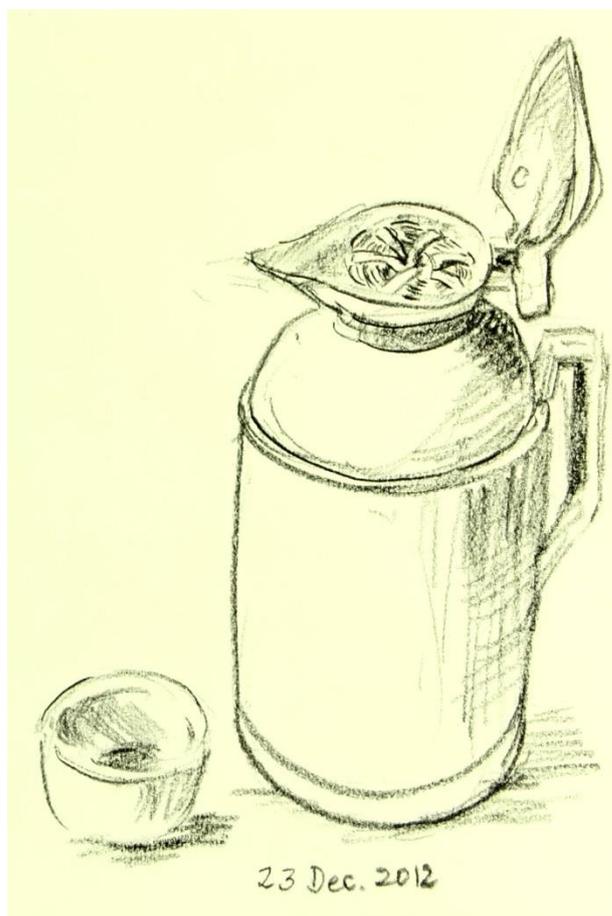


図 2 茶店に置かれる魔法瓶。コルク栓のかわりに竹ひごで編んだ茶こしが詰められている。

(2014年4月13日)